「養護学校教室足りない！」って、どういうこと？

６／１６の河北新報に宮城県内の「養護学校教室足りない！」の記事があった。

記事から、重い障害の子どもの車いすやベッド、医療器具の場所が必要なためもあるが、地域の小学校の特殊学級から中学部へ、また、「高等部への全入制度」で進学も増えていることが大きな要因のよう。

地域の学校は、少子化で空き教室が増えているというのに、なぜ、養護学校は教室不足なのか？当事者である子どもからの視線からのその検証は、なされているのだろうか。

折角、地域の学校へ通う障害児も多くなってきたというのに、障害児は、特殊学級から養護学校中、高等部へというレールが引かれているのでないかと危惧する。

ある知人から、「知り合いの養護学校高等部卒後の子どもの進路のことで、親の相談に乗って上げて」と紹介の電話った。自分のような者に回りまわって相談あるということは、学校が真摯に子どもや親と向き合い、親の相談に付き添い、寄り添っていないのでないかと思わざるを得ない。

つまり、養護学校側は、高等部卒業までのことしか考えていないのでないか。子どもの先々の人生（生きること）から、学校における教育活動を位置づけていないのでないのかと、つい思ってしまう。

恐らく、養護学校は、高等部卒後は地域の通所施設へということしか考えていないのだろう。現に、進路指導と称して通所施設を進路実習と称して一日見学するようだが、利用して貰うかもしれない施設側が、その生徒の日頃の行動の様子を聴取しようとしても、「書類を見て下さい。詳しくは担任でないから分かりません」との付き添った進路指導担当教師の返事だったとか。ここに、どうして養護学校が個々の子どもの進路を真摯に考えているといえるのだろうか。「そう思え！」という方が無理！

こうした実情を知るだけに、特殊学級→養護学校は、教育の場を単に代えているに過ぎない気がしてならない。

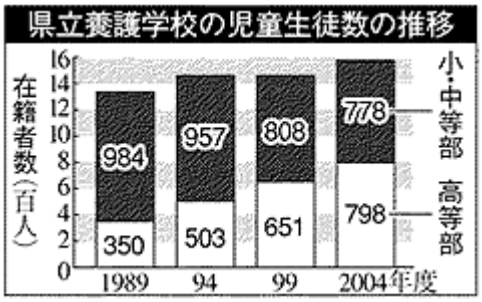
親たちも、高等部卒業間近で慌てることのないように、その子どもが地域で生きていくスキルをどう身につけて行くか、また、地域をどう変えていくかを、小、中、高等部いずれであっても、教師と共に相談・連携しながら取り組んで欲しいと願わざるを得ない。

卒業後、地域で生きていくのは、親でもなければ教師でもない。支援を必要とするその子ども自身なのだから！

（2005 年 6 月 18 日　記）

養護学校教室足りない！　全入制導入で生徒増　宮城

プレハブ教室が設置されても、教室不足は解消されていない＝名取養護学校



仙台市周辺の県立養護学校で生徒が増え続け、校舎が手狭になっている。プレハブ棟を増築しても教室不足は解消されず「狭い校舎を何とかして」との声が保護者から上がる。県が高等部への「全入」制度を打ち出して10年、進学率が向上したため、中高等部の生徒増が続く。現場から要望は強まるが、県は財政難に加え、普通学級での統合教育推進を掲げており、対応に苦慮している。

知的障害がある児童生徒が通う名取養護学校の校舎は築18年。6年前にプレハブ1棟を増築し、教材室など計10の特別教室を普通教室に改修した。それでも現在の学級数44に対し、教室は28しかない。

熊谷一夫校長は、「子どもの数が施設の収容力を超えている。普段の生活のほか、地震など緊急時に対応できるよう細心の注意が必要」と話す。

児童生徒は現在、小一から高三まで計181人と10年前の2倍以上。少人数指導が基本なのに、定員8人の教室に10人が在籍する学級もある。

重い障害の子どもを対象とする6教室は車いすやベッド、医療器具が必要となるため、さらに窮屈となる。中等部に通う男子生徒の母親は「教室はギュウギュウ。もう少し学級の規模が小さくなってほしい」と訴える。

背景には、県教委が1996年度に導入した県立養護学校高等部の「全入」制度がある。入学希望者を原則として全員受け入れ、少子化などのために小・中等部の子どもが減る一方、高等部は右肩上がりに増えた。利府養護学校（利府町）などでも生徒の増加が続く。

県教委は「中学の特殊学級から進学する生徒が増えたほか、重い障害がある生徒のほとんどが、自宅や施設より学校生活を希望している」（障害児教育室）と説明する。

名取養護学校では、仙台市在住の生徒の増加も大きな原因。現在、仙台市南部の子どもが全体の5割を超える。仙台市には県立光明養護学校、市立鶴谷養護学校と公立知的障害児学校が2校あるが、入学希望者を受け入れきれないという。

財政難のため養護学校の新設や大規模改修は難しく、県教委は今春、仙台市南部の市立小の空き教室を利用した「名取養護学校分教室」の開設を模索。市教委と調整したが、十分な教室を確保できず断念した。

県教委が本年度から、障害のある児童生徒が地域の普通学校で学ぶ統合教育を推進しており、関係者からは「統合教育と養護学校教育のバランスを取るのが難しい」との声も漏れる。養護学校教育のニーズも依然として高く、難しい対応を迫られている。

2005年06月16日木曜日